
くらすかくめい～起こすのは幼馴染～

volt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くらすかくめいゝ起こすのは幼馴染ゝ

【Nコード】

N7240L

【作者名】

v o l t

【あらすじ】

横須賀玲人の通っている学校は他の高校よりも特殊。主にどこが変わっているかという点、まず生徒会が二つあること、それと、進学校なのに問題児が多いということ。他には、先生同士で対立があったり、お祭り好きだったり、変り種な学校で起こるさまざまな出来事を書いた物語。

ぶるるーぐと悪い顔

僕の通っている学校は他の高校よりも特殊だ。主にどこが変わっているかという点、まず生徒会が二つあること、それと、進学校なのに問題児が多いということ。

他には、先生同士で対立があったり、お祭り好きだったり、さまざまな変り種な学校だ。

そんな学校に通って一年が過ぎた。都会とはいえないこの湊市みなとしに出来たこの変な学校、私立月光館学園しりつげっこうがくえんは、慣れれば面白い学校だった。

これから面白くなることを願って、明日の始業式に臨もう。

「初めては、こんなもんかな。」

僕は始めて書いた日記を机の棚にもどした。日付も書いていないその日記は、日記と言えるか分からない。書き記したのもただの大学ノート。何となく書き始めた日記は、続くか分からない。だからこそ、毎日書かないで、断続的に続けていこう。そう思って床に就いた。

起きた次の日は学校の入学式と平行して行われる始業式の日だった。普通の学校ではこんなことをしない。いや、他にしている学校があるか分からないけど、普通は別なのではないか、と思う。まあ、慣れればなんでも普通にみえる。

校長曰く『一日でも無駄に出来ない』らしいが、果たして勉学についていつているのか、それとも何か仕出かすつもりなのかは定かではない。

準備を済ませ、隣の家へ向かう。一緒に登校している幼馴染を迎えに行くためだ。

家に入ると、彼女の母親の周藤京子（すいとうきょうこ）さんがリビングでご飯を食べていた。

「おはよう。恋人が待つてるぜ。」

涼子さんは、男勝りという言葉がぴつたりと合う女性だ。因みに、おばさんと言うと、二時間十分にわたる説教が始まる。

「おはようございます。恋人じゃないって何回言えばいいんですかね？」

そういうと、京子さんはため息をついた。こっちこそため息をつきたい。

彼女の部屋に入ると、スースーと静かな寝息が聞こえる。寝相も大してない彼女は、長く漆黒の髪に寝癖も特にない。顔は綺麗とされていて、ここら一体で有名だ。お陰で、変な二つ名がついた。

「起きろ、沙耶（さや）。朝だぞ？今日から学校だぞ。」

ゆさゆさ、とまずは揺らしてみる。第一段階、なんのアクションもなし。

「起きろー！」

大声を出してみる。第二段階、反応なし。仕方がない、時間も危ないし最終手段だ。

「お前が悪いんだからな。」

そして僕は、彼女をベッドから蹴り落とした。

「きゃあ、痛いじゃない。何してくれるのよ。」

そういう彼女の仕草は可愛かった。顔が可愛いと、何だかんだ得だと僕は感じた。

「お前が起きないからだ！後少しで遅刻なんだ。」
「だって、性格と顔は関係ないから。」

「だからって、落とすことないじゃない！」

ヒュッ。それは、既に僕の腹に食い込んでいた。

「がはっ。」

思わず僕は膝を着いた。一瞬息が出来ず、思わず涙が出てくる。

「殴るなんて、ひでえな。」

また見えなかった。四年前から見ているそれは、未だに見えない高速の正拳突き。

「うるさい。玲人の癖に、調子乗りすぎよ！」

「悪かったつて。取りあえず、下で待つてるから。」

僕が部屋を出て行くと、急いでクローゼットを開ける音がした。少しばかり焦らないと間に合わない時刻だからだ。

「お疲れさん、また殴られたみたいだね。」

リビングに戻ると、ニコツと笑う京子さんがたばこをふかしていた。

「誰のせいですか？」

これは親父から聞いた話だが、京子さんは昔、関東で無敗伝説を作ったらしい。チームもレディースも無差別で潰しまわったつていと、何故か暗く話していた。

「悪い悪い。言葉遣いは女らしくさせたんだが、暴力は直らなかつたんだ。俺みたいに言葉荒いと、将来困るからな。」

そう言つて京子さん笑つたが、僕には笑えなかった。自衛とはいえ、強くしすぎるのもどうかと思う。

「相変わらず。寝起きが悪いのは誰に似たのかね。」

たばこの煙を吐きながら言う涼子さんの顔は、少し悲しげだった。きつと、なくなつた旦那さんを思い出しているのだろう。

「さあ？」

「用意できたわ！」

急いで降りてきた沙耶。時間もギリギリ。春休み前とは変わらない、いつも通りの生活。

「さあ、走るからね！」

「はいはい。」

僕らは急いで、周藤家を後にした。

学校に着くと、人ばかりで溢れていた。道の分らない入学生と雑談を繰り広げている在校生。お陰でクラス表が見えない。

「何しているの、玲人。あなたと私は特殊クラスでしょ？」

特殊クラスとは、特別推薦で入った生徒（特殊クラスのクラスメイトを特推生と呼ばれている）を集めたクラス。

「・・・やっぱり？」

さも当然のようにいう沙耶。認めたくない現実だ。

何故かって？それは、特殊クラスが別名『問題児クラス』と呼ばれているからだ。

学校の前理事長、犀川秀さいかわみのるが発案した、生徒救済制度。当時、中学生の登校拒否が増え始めた時期で、それらの生徒を助けようという制度、となっている。しかしそれは建前で、彼がこの生真面目だった学校をお祭り学校と言われるほど、色々な行事を増やしまくった張本人で、どうせそれで面白くなりそう、とかいう精神で作った制度なんじゃないかと言われている。

勿論、一般入試より二段階くらい難しいテストを強いられ、一般クラスより偏差值的に言えば、5上くらいじゃないと受からない。だが、その逆に言えば、どんなに中学で生活態度が悪かった不良や最悪犯罪者でも、勉強さえ出来れば入れるという、恐怖制度。

幸い、僕は素行も大して悪くないので、一般入試で入った。しかし、沙耶は違う。中学一年生の時湊市の不良潰し、二年にあがるときには、県下で最強と恐れられ、三年になって、県外から力に魅入られた猛者たちが来るようになった。学校からは嫌がられ、卒業時には別の意味で教師が泣いたほどだ。

そして、なんで僕が特殊クラスかというと、沙耶と、もう一人の幼馴染である水瀬亮介みなせりょうすけが僕を連れまわすからだ。別のクラスなのに、僕ばかり相手するから、いつの間にかクラスメイトから避けられ、孤立して、先生にも心底同情され、拳句の果てには学年主任に、

『特例で特殊クラスだから』なんていわれた。

正直泣いた。小中校と二人に連れまわされたのに、高校でも連れまわされるなんて、と思っただら夜枕をぬらした。まあ、二人とも何だかんだ馬合うし、いい人だし、楽しいからいいんだけど。

「はやく教室いこうか。」

僕は、不服だったが頷いた。

二一七の教室に入ると、一斉に目線がこちらに向いた。

「お、おはようございます。」

どれも見知った顔だった。特殊クラスのクラス編成は一人二人ぐらいいしか変わらないから、去年と大してかわらない。

『お、横須賀玲人だ！ついに奴も特殊クラスの仲間入りか！』

一人がそう叫ぶと、一斉に盛大な拍手が巻き起こった。

『これで俺は周藤さんの呪縛から逃れる！』

『よっしゃあ！これで周藤と水瀬は大丈夫だ。』

『これでやっと、二匹のじゃじゃ馬が静かになるね。』

『そうだね。』

皆好き勝手言いやがる。

「玲人も、一般から特殊クラス入りか。」

後ろから声がした。振り向くと、一人の男子生徒が立っていた。

「おはよう、ようやく仲間だな。」

そこに居たのは、漫画でよく見る輝きを見にまとったような爽やか少年。そして、このクラス最後の良心であるもう一人の幼馴染。

「おはよう、亮介。ここに入ったのは二人のせいだ。」

そういうと、亮介は苦笑した。

「俺一人じゃあ、沙耶の世話が出来ないからな。散々謝っただろ？」

亮介だけでは、沙耶の世話は出来ない。というか、厳しい。亮介は、戒心流かいしんりゅうとかいう拳法を習っていて、沙耶と対等な力を持っている。が、それも衝突すればクラスを巻き込んだ喧嘩が起きる。いや、力を持っているからこそ、喧嘩が起きる。おかげで、年中喧嘩して、僕がその仲裁で呼ばれること数十回。いつの間にか、喧嘩したら横

須賀に、が当たり前になった。

「……。」

「……。」

ジト目で亮介を見ると、目線を外した。逃げたな。

「はい、皆さん、適当に席について。」

担任教諭が着いたようだ。雑談をやめて、それぞれ席に着く。

「おはようございます、皆さん。このクラスの担任になった、椎名しい美奈みなです。」

そういつて、椎名教諭は頭を下げた。ちなみに、椎名教諭は小さい百五十センチ弱。よく生徒に隠れて見えなくなる。クラスの皆からは『美奈ちゃん』と呼ばれ、おっとりとしている。少し大きめのメガネをかけていて、メガネがずれて落ちそうになる姿とか、偶に小学生に見える。歳は二十代後半だと思われるが、本人に聞いても教えてくれない。

「新たな生徒は、横須賀君と如月きひのりさんくらいかな？」

そういつと、彼女は空いている席に目を向けた。今日は休みらしい。

「なあ、玲人。如月きひのりって誰？」

後ろに座っていた亮介から、耳打ちされた。

「如月きひのり桜。彼女のお兄さんが特殊での生徒会長だよ。」

生徒会長は、特殊クラスと一般クラスの二つから一人ずつ選ばれる。ちなみに、如月会長は前者だ。特殊クラスの家族が居れば、それだけで特殊クラスに入れられることがある。これは、その人が有名だった場合に限られるが。

「へえ。随分とご愁傷様な話だな。」

つまり如月さんは、巻き込まれた形になる。

「そうだね。」

特殊クラスだと、他の生徒から避けられるし、良いことなんてあんまりない。それは、去年身にしてみた。

「二人だけですので、自己紹介なんかはいいですね。取りあえず、今日は今から入学式と始業式なので体育館に移動してください。」

そういつて、美奈ちゃんは教壇から降りた。

その後、二時間ぐらいで式が終わった。今年の入学生の人数は三百人強。これで、今年の生徒人数は九百人を超えた。

「それでは、二、三年の特殊クラス以外の生徒は退場してください。」

そんな変なアナウンスが流れた。

「沙耶、今から何か起きるの？」

僕は彼女の顔を見たとき、話しかけたことを後悔した。

「そうだよ。今から、生徒会から話があるんだよ。」

彼女から溢れんばかりの闘志が見えた。

「亮介、何があるん？」

「そういや、玲人は知らなかったな。まあ、話聞いてみ？」

ニヤリと悪そうに笑った。もう確実に嫌な出来事。二人して悪い顔をしてる。いいことない、これは確定。

残ったのは百人ちよつと。皆、神妙な面持ちをしている。どうやら、特殊生徒でない人も混じっているようだ。

数分すると、一般の生徒会長である矢崎楓やまきかえでと如月会長、それに校長が壇上上がった。

『さてと、これからやるのは分かっているだろうが、今年の生徒会の与党派と野党派を決める戦争をやってもらおう。』

校長は、そう言つて、ニヤリと笑った。

皆、悪い顔ばかりしている。

ぶろろーぐと悪い顔（後書き）

はじめまして。初めて書いた現代学園ものですので、読みづらいか
もしれません。

もし良かったら感想お願いします

幼馴染という暴力

今日、校長が変な事を言い出した。『与党と野党を決める戦争をしよう』。それは、特殊クラスと一般クラスの戦争らしい。三年の一般生徒二百九十名対特推生八十人の。

それは、力の差をはつきりとさせる者で毎年起こることらしい。敵勢力が三・五倍。これでも通常のハンデより少ないらしい。

確かに上下関係さえはつきりすれば、むやみに衝突なんてことは起きないだろうが・・・。

それでもむちゃくちゃだ。一般生徒を巻き込んだ戦争なんて。

ざわつく体育館は、静まるようすがない。

「亮介、どういうことだ？」

僕は冷静にそう聞くことが出来た。

「どうもこうもそういうことだ。上下関係をはつきりさせるための戦争だ。俺らサイドと向こうサイドは、お互いバカにし合っているからな。」

そういう彼の目には大きな闘志が宿っていた。怖いぐらいに。

「これは毎年常例の行事なんだ、玲人。ぶつけ合って、与党派つまり優勢派と野党つまり劣勢派と分けるんだ。与党は特例の権限を与え、野党には与えない。これに勝つか負けるかで、五月にある生徒総会で打ち出せる政策が決まる。」

「権利？」

「議事を与党からさせる。」

つまり、特殊クラスがこれから有利に進むか不利に進むかがはっきりする、という事。

「・・・まるで国会だな。」

政治家の、ある意味選挙みたいだ。・・・そうか、それで『与党と野党』か。この制度を思いついた奴、確実に遊んでる。

「まあ、三年は既に受験モードで弱体化し始めているから、今回は私たちの力量に掛かっているわけだよ。」

後ろからひよっこり現れた沙耶が言うには、そういうことらしい。
「問題児対優良児か。」

それは、日頃からの不満をぶつける絶好の機会だ。この勝負で一年が決まるなんて、なんて大博打。

『勝負は明日の午後一時。戦い方はその日に発表しよう。今日は各々で集合をかけるといい。屋上とここを開放しよう。では、解散!』
校長はそういつて、壇上から降りた。

「はい、皆さん! 私たち一般生徒は、屋上で会議です! 移動をお願いします!」

その矢崎会長の言葉で、そろそろと一般クラスの連中が動き始めた。どうやら屋上に集合すると決めていたらしい。

「俺たちはここだ! 間違っても屋上には行くなよ!」
如月会長も頑張って声を張り上げる。

特殊クラスだけ残ると、如月会長は壇上を降りた。

「皆! 俺の周りに集まってほしい!」

そういつと、皆が集まっていく。僕も習って、できるだけ目立たないところに場所に移動した。皆が会長に注目したところで、静かに話し始めた。

「今回の勝負は、去年のリベンジ戦。勝ちたい所だ。」

頷く三年の面々。それを見て、会長がニヤリと笑った。皆、分かりやすいなあ。

「勿論指揮は俺が取る。特殊クラスの代表として、奴らに武人とい

うものをみせてやるよ。」

そういうと、周囲が騒ぎ始めた。士気が上がっていくのを感じる。

「だが、俺一人では全体を指揮するのは無理だ。戦うのはいいが、作戦とか唐木氏だ。」

会長から苦笑がもれた。

「そこで、だ。二年から一人。頭が回って、二年を統率出来る人物はいるか？」

こちらを見渡し始めた会長の目は、真剣だった。こんな時にふざけられる猛者は、僕が知っている中で一人しか居ない。

「玲人はどうかな、如月センパイ？」

沙耶さん、・・・ヤハリオフザケニナレルノデスカ？

「玲人？もしかして横須賀玲人のことか、周藤？」

僕ってフルネームで覚えられるほど有名なの？

「です。」

コクコクと頷く彼女の顔は笑っていた。しかも、嫌な方の。

「特殊クラスにいるのか？やつは、一般クラスだろう？」

「いえ、今年から特例で特殊クラスです。」

やばいぞ、このままいけば確実に面倒なことに巻き込まれる。話をしている隙に、体育館から逃げるしかない。

そう思って彼らの死角から脱出を試みる。

「しかし、そんなすごいのか？」

ハハハ、僕八何処モスゴクナイデスヨ。

「ええ、そりゃあもう。」

いえいえいえ、沙耶さん何言っちゃってんですか？僕をボロボロにする気ですか？

あと少して体育館の出入り口だった。だったのに、深く凍るような殺気が、僕を貫いた。振り返らなくても良く分かる。『氷の女神』

とか『地獄の天使』とか呼ばれている、沙耶の殺気。

「・・・だって、たった今まで誰にも気付かれずに、出入り口までたどり着いたのですから。」

ばつと、注目が僕に集まる。会長が確信したような顔と沙耶の『逃げるな』という目が、同じ物に見えた気がした。

全力の脱走空しく、1分で捕まりました。沙耶と亮介の神速な走りと、会長の的確な指示。囲まれて、宇宙人みたいに連行されました。

「ということ、今回の副将は横須賀だ。三年もある程度彼の指示に従ってほしい。じゃあ、一言どうぞ。」

「出来る限りの尽力する所存であります！」

そう言つて敬礼すると、どつと笑いがおきた。くそあ！みんな鬼だ悪魔だ！か弱い僕が、何故最前線に立たなければならぬんだ！

「じゃあ、みんな。今日やれることは、明日のために体調を整えることだ。今日は早く寝るように。では、解散！」

今まで静かだった面々が急にうるさくなる。明日のことを真剣に話しているものは居らず、それぞれ楽しそうだ。

「横須賀、ちよつと。」

そんな中、会長が僕に手招きしていた。近寄ると、右手を差し出してきた。黙つて右手で返すと、会長は苦笑した。

「明日はよろしく頼むぜ？無理矢理だったが、俺は適任だと思つてる。」

確信したような顔してたもんな。

「まあ、やるからには全力でいきますよ。」

「手抜いてやったら俺が潰すけどな。」

ニコツと爽やかに笑つた会長の目は笑っていなかった。

「如月海里だ。」

律儀にそう言つてきた会長がなんだかおかしかった。

「今更自己紹介ですか？」

「遅くなると出来ないだろ。横須賀玲人くん。」

「自己紹介の意味なくないですか？お互いがお互いを知っていたら。」
「そうか？いいだろ、こういつの。有名人同士、仲良くしようぜ。」
そういつて、首に手を回し、ヘッドロックをかけてくる会長は子供のようだった。
「いたたたた、ギブギブギブ。」
会長の力は半端じゃなかった。その証拠に、首に赤い後がついている。

「ところで先輩、一つ尋ねてもいいですか？」

「なんだい、後輩。」

言葉は遊んでいたが、会長はふざけている雰囲気はなかった。

「去年の勝負はなんだったんですか？」

「ケイドロ。」

「はい？」

「だから、ケイドロだってば。」

「……ちなみに、一昨年は？」

「缶蹴り。」

軽く頭痛がした。『この学校は真面目で優等生じゃない』。そう思い込んでいたのは僕だけだったようだ。血の気の多い人たちが多いこの戦いでは、集団リンチが起こっても不思議じゃない。僕のように身を守る手段のない人たちは、一体どうすればいいのだろうか？
「まあまあ、そんな顔するな。」
先輩は、そういつてにやりと笑った。僕は一体どんな顔をしているのだろうか？

「横須賀が思っている以上に、この戦いは面白いからよ。」

「……はい。」

ケイドロや缶蹴り。まるで子供の遊びをチョイスする校長の考えが理解できなかった。

会長も同族

当日、僕と沙耶は予定時刻より十分早く学校に向かった。何となく、お祭り好きな彼らは既に集まっているという予感がした。

「どんな競技なんだろうね。」

今朝から沙耶は落ち着きがない。この台詞も何十回聞いたことが。

「さあ？」

そして、この返しも変えるつもりもない。

昨日から僕には、『全て』が分からない。如月先輩も矢崎先輩もこの戦いは、非常に重要な戦いとなることは分かっているはずだ。それなのに、競技はとてもふざけたものだ。子供の頃やるようなゲームでは数がものを言う。勢力的に圧倒的に不利だ。

「すごいね。」

沙耶が呟きが聞こえて、急に現実に戻された。

「何が？」

「何って、玲人には声が聞こえないの？」

「声？」

周囲を見渡す。しかし、そんな不思議なものは聞こえない。あえて言うのなら、運動部の声だろうか。『うおおおお』という野太い声が聞こえる。

「運動部のこえじゃないの？」

そう聞くと、沙耶は首を横に振った。

「今日は、部活なんて出来ないよ。『戦』だからね。」

「沙耶、急ごう！」

僕と沙耶は出遅れたみたいだ。

中庭に他のみんなは集まっているようだった。本当に出遅れた。先程の野太い声は、一般生徒が気合を入れていた声。申し訳なく思えた。周りを見ても、昨日の様な雑談をしている様子はない。本気、それは十分わかった。

「よう、やっと来たか。みんな待ってっぞ。」
既に先輩は、如月会長となっていた。

「すいません、遅刻しました。」

「別にいい。時間ではまだだ。」

声には、余裕がなかった。

「ごめんね、センパイ。」

「・・・はあ。」

沙耶って実は大物なんじゃないかと思う。

「全員集まったところで、エンジン組むぞ！集まれ！！」

その一言で、会長の中心にして不恰好なエンジンが出来る。

「てめえら、気合入れる。前回のリベンジ戦。絶対に負けられんねえからな！」

会長の声が空気を奮わせる。

『おおおおー！』

士気が上がっていく。思わず僕も声を出していた。

「勝つたら会長の奢りで焼肉だああ！」

と、そこに先程の野太い声より少し高い声が入った。

『おおおおおー！！』

「え、ちよつと待て美香^{みか}。俺そんな金ねえぞ！」

慌てているが、もう既に遅い。否定出来る雰囲気ではない。ご愁傷様です会長。

「頑張るぞおおー！」

『おおおおおおおー！！！！』

若干一人以外、土気も問題ない。後は、内容にだけだ。

『おい、ちよつと待て。嘘だろ？マジか？マジなのか？』

『どんまい海里。』

『てめえのせいじゃ！』

『あはははは！』

『笑ってんじゃねえぞ！』

会長は財布を見ながら泣いていた。

「会長大丈夫か？」

亮介がいつの間にか僕の隣にいた。

「さあ？大分まずいんじゃない？」

この特殊クラスでふざけるなんて行為は通用しない。きっと、何方面から攻撃されて驕らされるだろう。

「だよなあ。」

きっと僕も亮介も他人事には思えないが、そういう風に言いたくない。僕らには、ああいう事をする輩が居る。

「二人ともどうしたの？」

沙耶さん、可愛く顔を傾けても口元がニヤリと笑っているようでは、まだまだですよ。

「「いいや、なんでもない」」

ハモったのは、決して偶然ではない。

『それでは、競技の内容を発表する！！』

時間ぴつたり放送が流れた。集合場所も指定されていない所を見ると、こういう事だったのだろう。

『今回のゲームは、宝探しだ！学校内に宝を隠した。その隠し場所は、決してヒントなしでは辿りつかないよう、な。ヒントは、私独自の方法で隠した。知りたければ、自分で探せ。宝を見つけたら、私の元に来るといい。ルールは、四人一組の団体行動を基本とし、

それを外れたものは即失格だ。一対一の戦いは許可するが、承諾なしの一対多数は禁止だ。勝者は、敗者の持つているヒントを貰う権利を与えられる。負けた者はその時点でリタイア。戦い方はお互いの同意の下で決めると良い。校長室を戦闘禁止区域とし、中立区域としよう。私もそこにいる。』

校長はそこまで一気に喋った後、十秒ほど沈黙を作った。

『最後に、故意に重傷者を出した者は必ず退学とする。』

そういつて、ブチっという機械音が聞こえた。これで言いたいことを言ったという事だろう。それにしても先の声、低く鋭い声だった。本気という事だろう。聞いてない、なんていわせないように。

「今から各自四人一組を作れ！必ず、一組に一人ずつ男女を混ぜる！」

柔軟な対応だった。会長が言い終わった時には、既に大半が班を作り終えていた。

「やっぱりこうなるよね。」

そして、僕の周りにはいつもの面子が集まっている。

「だろうな。」

少し呆れ顔の亮介。

「とーぜん！」

当たり前のようにいる沙耶。

「俺も混ぜる。」

それと、極悪そうな顔をして加わる会長。学校最凶のチームが出来上がった。

「じゃあ、そろそろやりますかね。」

そついうと、会長は大きく息を吸った。

「二組で一部隊とする。離脱を極力避ける！拠点をこことし、休憩、情報公開をここと行う！」

中庭が騒がしくなった。二組で一部隊なんて、探索範囲を狭める行為だ。しかし、どんなことがあってもチームは減らせない。それは事実だった。これ以上戦力が開いては戦いにならない。

「少なくともここに二部隊を待機させること！いいな！！それでは各自、散策開始！」

そういうと、各自動き始めた。残るものは少なかったが、やる気のない者、それと会長の生徒会の連中が残っている。三部隊というところか。

「センパイ、どうするの？」

今日の沙耶は落ち着きがない。それは亮介も同じ。彼らが言うには、血が騒ぐらしい。

「勿論、これから遊びに行くにきまってんだろ？」

会長も彼らと一緒にだ。態度が同じ。しかも、彼らにしか通じないような言葉を使っている。遊びにいくなんて、なんて嫌な表現なんだ。次に何をいうか、僕には良く分かってしまう。彼らのしたいことなんて、なんにも考えなくてもわかってしまう。

「敵陣に、乗り込むぞ。」

ああ、もういやだ。この人たち、同族だ。思わずため息が出た。

大丈夫そうじゃない顔

「敵陣に、乗り込むぞ。」

会長は、もう最初っから突っ込む気らしい。というか、つつこまないという選択肢はないらしい。

「……会長格好良いですよ。頑張ってください。」
そういつと、肩に会長の手が乗った。

「何を言う。お前も、乗り込むんだぞ？」

笑顔でなんて怖いことをいう。

「いえいえ、僕は非戦闘要員なんで。」

「いやいや、謙遜しなくても結構。俺は全て把握しているんだぞ？」

『あの二人』を止められる男が弱いわけないだろう。」

そういつて、会長は後ろの幼馴染をあごで差す。それと同時に肩に乗っかっている手に重圧がかかる。

「いえいえいえ、それがそもそもの勘違いです。僕は、ただの、幼馴染です。決して、鬪える、わけでは、ないです。」

お、重い。先輩の力、半端じゃない。

「おらおらら、もつと強くしてもいいんだぜ？」

「く、強制、ですか。」

「当然。」

ちっ、奥の手を使うか。

「会長、後でどうなっても、知りません、からね？」

「……。」

ふっと、肩の重圧が消えた。

「さ、沙耶、亮介。敵地に乗らむらしいから、……逝こうか。」

「おい！なんだ今の間！なんかとつても危ない臭いがするぞ！」

「早くしないと置いてくよ、センパイ。」

「そうですぞ、会長。全然危なくないぞ？」

流石幼馴染。アイコンタクトもせずとも、僕に合わせてくれる。

「何で皆笑顔なんだよ！怖えよ！なんかありそうだぞ！」
「いやいや、何もしませんってば……たぶん。」

「で、どこに行くんですか？」

僕は、何となく会長の後を着いていく。決して、勘ではなく行く場所が分かっているような雰囲気だったからだ。

「あんな人数教室なんかじゃまとめられねえ。だとしたら、屋上とか体育館とか、な。」

「そうですね。二百人近く居るから、場所は限られてくる。」

「ああ。それに、中庭は俺たちが占拠しちまったからな。集まっている場所は限られてくるわけだ。まあ、特に」

目標地点についた。そこにいたのは、百人ぐらいの人。

「グラウンドなんかいいんじゃないか、と思っただけ。」

広いグラウンドは大きな黒い点ができていた。

「お、なかなかの数いるね。」

嬉しそうですね、沙耶さん。

「あんなんで、大丈夫かよ。」

何がですか、亮介？

「まあまあ、大丈夫だろ。みんな運動部だろうし。」

「ああ、死人がでも知りませんよ。」

相手が可哀想だと思った。

「やっと、来たわね。」

後ろから、声がした。透き通った声だった。

「矢崎、いいのか？こんな所に居て？」

振り返ると、立っていたのは矢崎会長だった。待ち伏せしていたのだろうか？

「何よ、如月。そんなの私の勝手。」

「で、なんだよ？お前がそんなところに立っていること自体自然なんだが、わざわざ俺と戦いにきたわけじゃねえだろ。」

え？後ろに立っているのが自然？如月会長と矢崎会長の仲って一体・・・？

「まあ、ね。取りあえず、あそこに居る人たちは、貴方たちのために用意した猛者たちよ。貴方や、後ろの三人に怨みを持っている人たちよ。」

「え？僕も含まれるんですか？」

「？何を当たり前なこと言っているの？」

さも当然のように言われた。

「・・・。」

僕は、一体貴方たちに何をしましたか？

「だから、会った瞬間喧嘩になると思うわ。」

矢崎会長が嘲笑気味に笑った。

「もともとそのつもりだ。何のために、こいつらと一緒にになったと思っっているんだ？」

「そう言うと思った。細かいルールは指定されていなかったし、乱戦になっても何も言われない。何とでも言い訳ができるようなメンバーだし。まあ、怪我しないように。」

「おいおい、誰に言っただ？」

「そう。じゃ、私はいくね。」

そういって、矢崎会長は校舎の方向に去っていった。

「ねえ、玲人。矢崎センパイと如月センパイって付き合ってるの？」

沙耶が耳打ちしてきた。

「いや、そういう噂は聞いたことないけど。」

先輩たちの会話に違和感を感じた。まるであれでは・・・。

「じゃあ行くか。戦場に。」

会長が歩き始めたせいで、思考を中断せざるを得なかった。

グラウンドの方向から叫び声が聞こえた。どうやら、如月たちと私の用意した人たちとの衝突が始まったらしい。

「あんなんで、どれだけ時間が稼げるか。」

最低でも三十分は持つだろう。その間に、残りの二百人に見つけさせなければならぬ。なんとしてでも『宝』を見つけてもらわないとならない。

全く、それにしても校長もひどいことをする。

「私も戦おうかな？」

そうすれば、少しは暇でなくなる。指揮は、副会長に任せてあるし、足止めもやった。作戦も作ってあげたし、やることは全てやってあげた。

だから、『宝』を見つけられるかどうかは彼ら次第。

「会長は、何もしないんですか？」

急に私の後ろから声が聞こえた。聞いたことのある不機嫌そうな女性の声。しかし、彼女自体はそれを意識的にやっていないのは、普段の彼女をみれば明らかだ。振り返ると、一つ年下の幼馴染が立っていた。

「桜ちゃん？」

漫画なんかに出て来そうな長い黒髪。鋭い目つき。正に、クールビューティー。何時見ても、綺麗な顔をしている。

「ええ、バカ兄貴の妹です。」

いつから後ろについていたのだろうか？全く人の気配がしなかった。

「貴方こそ何してるの？如月は、向こうで戦闘中。」

私はいつでも逃げられるように身構えた。彼女は特に戦う気がないみたいだが、用心は必要だ。

「知ってますよ。声が聞こえましたから。」

「じゃあ、なんでこんなところにいるの？」

「敵に情報はあげませんよ。」

「・・・ゲームに参加する気がなくせに？」

ずっと彼女の目が細くなった。

「残念ながら参加しようかと思えます。」

「なんで？」

そう聞くと、その答えが帰ってくるまで少し間が空いた。

「たまには、私も遊びたいので。」

「。。。。。」

私には、彼女の本心を確認できない。彼女の表情から、何にも情報をくれない。

「では、私はこれで。矢崎先輩も頑張ってください。」

「あ、うん。」

そういつて、彼女は校舎の中に入っていった。

「強敵、出現かあ。」

私は急いで携帯電話を取り出した。

「センパイ、こいつら雑魚だね。」

殴りながら、二人は戦う。その声には、未だに余裕を感じさせる。

「じゃあねえよ。すごいのは人数だけだからな。」

僕を守るように亮介が僕の目の前に居て、会長と沙耶が二人と戦う。

「多分、後から強えのが出てくるから待って。」

彼らは、既に敵を半数ほど潰した。戦いも数十分と経っている。だが、まだ戦い始めのような会話に思わず耳を疑う。まるで、戦いが始まっていないような、そんな感覚を受ける。

「本当に？期待しちゃうよ？」

「ああ。だから、待ってるって。」

それにしても、矢崎会長の言っていた話はどうやら本当だったようだった。怨みだけで戦っている彼らにとって、指揮というものがなかった。ただ戦っているだけ。個人対個人だった。彼らが言っていたように、人数が多いだけのようだ。

「不自然だ。」

だからこそ、この戦いは不毛すぎる。矢崎会長には、あの二人に勝てるわけがないのが分かっているはずだ。それは、さっきの会話から判断できる。まるで、怪我もしないようなことを言ってたし。

なら、なんでこんなに敵を送る？沙耶たちを倒すため？いや、両方違うはずだ。如月会長も、沙耶も全然疲れていない。如月会長と矢崎会長は仲の良い友達みたいだし、お互いの実力も知っているよ。うだった。こういう結果になることも予想できたはずだ。それに、人数を減らすのは、得策じゃない。なら、なぜわざわざ味方を減らすような配置にした？これをする事によって相手に何のメリットがある？

「・・・そうか、やられた。」

「何が？」

前に立っている亮介が振りかえらず尋ねてくる。

「この意味のない戦いは、時間稼ぎなんだ。」

「時間稼ぎ？」

「うん。沙耶と会長は無尽蔵だからね。探索している間に、味方を倒されたら効率が悪い。なら、固定した場所に向かわせた方が効率がいい。」

そう、いくら数で勝っていても、潰されていたらいつか数で逆転される。

「でも、会長がこないかもしれないだろ？そんな不確定なことになんかに人数を用意するか？」

「いや、会長の性格からして、行かないなんて選択肢はない。それを矢崎先輩は知っていて、わざと目立つグラウンドに統率の出来ていない敵勢力をぶつけているんだ。」

「だが、なんでわざわざそんなことを？」

「今のうちに、僕らの勢力を潰すため。」

特殊クラスとはいえ、何グループも連続で勝負されたら・・・。

「なるほどな。で、どうすんだ、玲人。」

「・・・これから、僕らでなんとかするしかない。」

「だが、前にいるやつらはどうするんだ？」

今沙耶たちが戦っている連中は、まだかなりの数だ。これでは間に合わない。

「あれは、二人に任せるよ。僕らは僕らで行動しようか。」

「しかし、それはルール違反じゃないのか？」

「特定のルールじゃないよ。原則じゃなくて基本とするだけって言うてっつたし。言い訳は出来るよ。」

「まあ、いいか。」

流石は亮介。特に突っかかって来ない。

「僕らは僕らで、校長のいう『宝』を見つけた方が効率いいでしょ？」

「探さないよりはな。」

「じゃあ、決まりだね。」

僕は、二人とは真逆にある校舎に向けて歩き始める。

「二人に言わなくていいのか？」

「二人が居なくても、大して変わらないよ？」

「・・・まあ、いいか。」

いやいや、別に大丈夫って顔してないよ？

逃がすわけには行かない仲間

「まずは、どこに行くんだ？」

隣を走っている亮介が話しかけてくる。と、聞かれてもいける場所に限られている。

「そうだね、隠れるところかなあ。」

後ろを見て、自分の判断が正しい事を再認識できる。

「それもそうか。しっかし・・・」

「ん？」

「何であんなに追っ手が来ているんだ？」

後ろの追っ手 多二十人以上 が僕たちを苦しませている。多分、文化部の奴らだ。足の速さも体力も運動部でない僕より劣るとなれば、受験始めて弱体化し始めた人たち、って所だろう。

「それは、亮介が『王様』とか言われているからだよ。」

沙耶に対抗できる亮介は、いつの間にかそういう立場になっていた。県内で恐怖の対象となっている沙耶は、この学校では『女王』という呼び名となった。彼女に対し絶対服従が原則とか言われているから。それに対抗できるとなったらもう王様だろう、なんて下らない冗談から生まれた亮介の呼び名。

「初耳だな。」

「まあね。聞かれないようにしているからかな。」

まあ、僕も亮介も沙耶同様たくさん渾名をつけられているけど

そう言おうと思ったが、なんとなくやめた。

「それに、僕らは特殊クラスの中でもかなりの精鋭なのは確かだからね。」

矢崎会長も、僕や亮介に荒らされたくないはずだ。流石に十倍近くの戦力と戦うのは疲れる。先を考えれば、戦わずいたい。相手が来るときに備えが必要なことは確か。

「とりあえず、彼らを撒かないとどうにもならないなあ。」
「いい加減走るのも疲れる。」

「亮介、休めて敵と戦わない場所、ないかなあ？」

隣の相棒に尋ねると、彼は見つけられたような顔をしていた。

「なあ、玲人よ。校長室なんてどうよ？」

「校長室？」

今回の中立区域？確かに敵と戦わずに済むが……。

「だけど、あそこを囲まれたら抜け出せなくなるよ？」

「そんなもの、玲人が考えればいいだろう。」

「……。」

ジト目でみると、冷笑で返された。ならお前が案を出せ、と彼の目が言っている。

「沈黙か、てことは肯定だな。」

「はあ、どうなっても知らないよ。」

「大丈夫、俺も知らん。」

隣の相棒は、無駄に頼りになりそうなオーラを放っていた。

校長室の前は静かだった。他のどの部屋にあるドアよりも高価で、木彫りのドアが目の前にあった。

「早く入らないと、みつかつちまうぞ？」

しかし、僕は入れずに居た。目の前にたつとなにか『悪寒』らしきものを感じる。それは、言葉なんかじゃ形容できないような、最悪のものだ。

「亮介、僕には入ってはいけないような気がするんだ。」
僕が、精一杯真面目な顔を作っっていつてみる。

「……。」

いや、そんな胡散臭そうな顔で僕を見ないで。

「横須賀君？」

後ろから急に声が聞こえた。僕らは何も考えずに、左右にとんだ。

「玲人、敵か！」

振り返って相手の顔を確認してみる。そこには、見知った顔がいた。

「如月さん……？」

如月桜。僕と同じく巻き込まれ人員。唯一、無理矢理このクラスに入らされた仲間。

「……貴方たち、本当に日本人？平和に浸っていればそんな行動すぐさま取れないわよ？」

何故か、如月さんに呆れられた。

「そんなことより、こんな所でどうしたの？あんまりうろうろしていると、戦うはめになるよ？」

「そこら辺の奴らには、勝負を挑まれない術ぐらい持っているわ。」
流石特殊クラス。普通そうな少女ですら、何かしらの技能を持っている。

「なあ、玲人。そのこはだれだ？」

「如月桜さん。」

「ん？どこかで聞いた名だ。」

「昨日、HRで説明したでしょ？」

「ああ。巻き込まれた。」

「正解。」

「ねえ？貴方たちに礼儀っていうものがないの？」
如月さんがイライラしていた。

「まあ、いいわ。どうして、こんな所に居るの？」

「こんな所？」

「校長室前。」

そういえば、目的を忘れていたな。

「それは……。」

『おい！横須賀たちを見つけたぞ！』

『校長室だ！』

そんなことをしていると、追っ手が僕らを発見したようだ。敵数は、十人ほど。

「やべーぞ、玲人。奴らに見つかった。」

「如月さん、こっち！」

僕は咄嗟に、如月さんの手をとって、駆け出した。

「ちょ、なんで手握ってんの？」

何故かって？如月さんを巻き込めるからね。

「流石だ、玲人。」

相棒は、僕の考えが読めてらしい。そちらこそ、流石だ。

思わずニヤリと笑ってしまった。相棒も同じことを考えていたらしい。同じ顔をしている。すっかり手を繋ぎながら着いてきてくれてくれている如月さんの顔は、狐につままれたような顔をしていた。

「センパイ。そっちは終わった？」

「おう。」

相手は百人ほど。私達に取って、地面で寝ている雑魚どもは相手にもならなかった。未だ、準備運動ぐらいでしかない。数が居ても、雑魚は雑魚。

「大した相手じゃなかったな。」

「そうだね。最後の方に少し骨のある奴がいたくらいかな？」

「合気道部部长を十秒で倒すあたり、お前何者？」

国体出たことのある選手っていうから期待したのに、型から抜け出せない雑魚だった。

「私は、私だよ？何者でもないでしょ。」

「・・・まあ、いいか。」

センパイは、何か言いたそうな顔をしていたが、そこまで言葉を

引っ込めた。

「それで、センパイ。一つ聞いていいかな？」

「なんだい、後輩。」

「玲人と亮介はどこ？」

いつの間にかグラウンドに立っているのは、私とセンパイだけだった。

「さあ。」

「・・・お仕置きが必要なのかなあ？二人とも。」
最近、新たに試したい技があるんだよね。

その重庄は、如月さんと逃げているときに掛かった。

「りよ、亮介！」

急にゾツとした。思わず足がすくむような悪寒がした。

「ちっ！沙耶が暴れ始めたか。」

相棒も察知したらしい。こんな重い重庄を向けられる人間は、この学校には沙耶以外存在しない。『女王』がその力をフルに使って暴れ始める『予兆』を感じる。

長い間、沙耶と共にいると感じれるようになるこの重庄。それは、暴れる前に沙耶が発する『殺す気のない殺気』。こうなってしまうら逃げるしかない。何か、気に触れるようなことを誰かがしたのだろうか？

「おい！誰だよ、沙耶を不機嫌にさせたの？」

「グラウンドの奴らかな？」

「それはないだろう。あいつ等なら、沙耶に潰されているから、不機嫌になる理由がない。」

それはそうだ。その場で潰せるなら暴れる前に、ボコボコにしている。なら、処刑対象が逃げたもしくは逃げていたことになる。さてよ？沙耶から逃げられるほどの実力を持った人物がこの学校にいるの

だろうか？いや、いないだろう。いるとしたら、亮介ぐらい。なら、対象は沙耶が気付いたときには居なかった人物になる。……って
「まさか……。」
亮介も気付いたみたいだ。そんなに沙耶と関わりを持っている人物なんて、この学校に二人しかいない。

「対象は、僕ら。」

僕も亮介のように顔面蒼白になっているに違いない。生きた心地がしない。何時の間にか、足が止まっていた。

「ちょ、二人ともどうしたの？手が震えている。」

如月さんが、心配そうに僕の顔をのぞいてくる。沙耶のお仕置きと題した処刑が近づいているとなると、震えが止まらない。

「やばいな、玲人。やっぱり、置いていかなければ良かったな。」

「うん。まさか、ここまでストレスが溜まっていたとは。春休み、あんま一緒に居なかったからなあ。」

「どうするよ？このままだと通院確定だぞ？」

三年前にやられた古傷が痛んだ気がした。

「逃げるには、この学校だけのステージじゃあ狭すぎる。せめて、町全体じゃないと一時間持たないよ。」

「今からサボるか？」

「会長が相手に増えるよ。」

「くっ、万事休すか？」

「……二人とも、何を話しているの？」

如月さんが不機嫌そうな顔で僕に尋ねてくる。そりゃあ、蚊帳の外じゃあ、不機嫌になるか。

「どうやら、沙耶が暴れ始めたらしいんだ。」

「周藤さんが？」

「うん。しかも、僕らが原因らしい。」

「……貴方たち、何したの？」

如月さんの眼が鋭くなった。ちよっと怖いかも。

「ちよっとね。」

僕が苦笑すると、目の前の女の子は大きくため息をついた。

「まあ、いいわ。それで？何か聞きたいことがあるんでしょ？」
確かにそうだけど、何で分かったんだらう？

「それで、どうにかしてこのゲームから抜け出したいんだ。」
とりあえず、逃走手段を手に入れないと、捕まってゲームオーバーだ。沙耶を撒けるほど準備と時間が足りない。

「抜け出すのは簡単。でも、兄貴とは戦いたくないんでしょ？」

「そうだね。二人も相手に出来ない。」

沙耶だけでも精一杯なのに、会長もまでなんていったら、撒くなんて不可能だ。

「なら、このゲームを終わらせるしかない。兄貴は、仕事さえすれば文句言わない。」

「やっぱりか。」

会長と戦わず逃げる方法なんて限られてくる。他にもあるが、これが一番現実的と思う。

「玲人、短期決戦だ。どうせ、一時間掛からず見つかる。」

「急ぐよ、二人とも。どちらにしても、勝たないと話にならないよ。」

「ちよ、私は違うでしょ？」

右手は僕が、左手は亮介が、しっかりと手を握り締め、走り出した。逃がすわけには行かない。大切な大切な仲間なのだから。

思わずにやりと笑ってしまった。相棒も同じことを考えていたらしい。同じ顔をしている。如月さんは、誘蛾灯のような体質らしい。

不意打ちの鉄拳

散々敵から逃げ回って疲れた僕らは、如月会長側の生徒会室で僕は一休みすることにした。

「で、どうするの？このままだと、まずいんでしょ？」

如月さんが不機嫌そうな声で さつきからずつとイライラしたような声だ 僕にたずねてくる。

「うん。だからまずは、相手を倒してヒントを集めようと思うんだ。」

「敵からヒントを？でも、純粋に教えてくれないでしょ？」

「いいや、それは大丈夫。こっちには、秘策があるから。」

もちろん、純粋に教えてくれる人ばかりではないが、それでも亮介と僕が聞けば素直に教えてくれるはずだ。

「それより、僕らには単純にぶつかって行くだけの時間が足りない。だから、ヒントを持ついる人物を見つけるしかない。そんな人物を、如月さんは知らない？」

僕らより歩き回っていた如月さんなら、多分知っている。

「・・・持っているかもしれない人たちなら知っている。」

「誰？」

「矢崎会長の生徒会役員。」
「やっぱりね。」

「なるほど、幹部か。」

彼らなら確かに知っているかもしれない。向こうの統率力は、こちらをはるかにしのぐ。ならあそこに集めているに違いない。

「それなら、話が早いな。突っ込むか！」

亮介は、既に行く気だ。真っ直ぐな道しか選ばないその心意気は、

尊敬に値する。

「亮介、そう簡単に解決できる話じゃない。敵さんもバカじゃないんだ。護衛くらい置いてるさ。」

「だけど、今回ばかりはそうは行かない。他の人が当てにならない今、何も考えずに突っ込むわけにはいかない。」

「敗れなければいいだろう?」

「流石に無理だよ。相手だって対策くらい練ってくるさ。大方、畏でも張っているんじゃないかな。」

「張ってはいけないなんてルールなかったし。」

「じゃあどうすんだよ? 正面以外に何処から入るんだ?」

「それは、思索中。」

「だけど、時間は限られている。そんなことしてたら、沙耶に見つかるぜ?」

「わかつてる。」

その通りだ。時間が無い。限られた時間の中で、沙耶に捕まらず、戦わなければならない。

「ねえ、今の貴方たちが今しなければならぬことって何?」

突然、傍観者だった如月さんが、そう僕に尋ねた。

「沙耶に見つからないことと、生徒会本部から情報を得ること。」

僕がそういうと、如月さんは眼を瞑った。

「どうしたの?」

「・・・話しかけないで。」

鋭い声だった。亮介を見ると、やれやれ、とか思ってたような顔だった。

五分くらい考えていると、彼女が眼を開いた。どうやら終わったらしい。

「二人とも耳貸して。」

如月さんの顔は、無表情だった。

「センパイは、職員室方面を探しにいつて。」

「お、おお。」

センパイは少し恐怖を感じているような雰囲気だった。余程私が怖いのだろう。今ならそこら辺のチームやレディースを潰しにいくほどの闘志が、私の心の中で暴れている。それにしても、あの二人。私を置いていくなんて、どんな度胸と心意気だろうか。実は、入院したいのだろうか？

そんなことを思っているときだった。放送が流れる前の音楽が流れた。

『特殊クラスの野郎共！聞いて驚け、俺たちは宝を手に入れた！』
亮介の声だった。台詞を棒読み気味で、似合わない口調はとても真実には思えない。

『だから、今から奴らと最終決戦だ！受験でひ弱になりつつある優等生たちを見返してやろう！俺や沙耶ももちろん潰しに行く！俺たちが居るんだから負けはない！場所は生徒会室、俺らも今から行く。だから、皆で倒そう！』
それで放送は終わった。

「生徒会室！お望み通り倒しにいつてあげるよ、お二人とも！」
私は、全力で向かい始めた。亮介たちを倒すために！

「どうやら、ターゲットは予定通りの動きで移動中。」
精々、私の策に踊れ、優等生。

「こんなうそ臭い台詞でいいのか？」
水瀬くんが、あえて棒読みっぽく読ませた。それについていつているのだろう。

「ええ。私が動いて欲しいのは、最低でも周藤さん一人でいいから。」

皆で突っ込んでしまつたら、返り討ちにあうだろう。しかし、周藤さんは違う。兄貴と同種。底が見えない体力と戦闘力を持っている。「周藤さんの声」を聞きつけて、特推生が集まってくる。そこから第二段階スタートね。」

後は、横須賀君次第だ。彼が持ちかけた話なんだし、自分の力で解決してもらわないと困る。

「わかった。じゃあ、俺は仕事してくるわ。」

そういうと、水瀬くんは生徒会室から出て行った。

「。。。。」

私の考えた作戦は、結構自信が有る。横須賀くんや水瀬くんには大分無理難題を押し付けたが、やってのけるだろう。

だって、失敗したら周藤さんの折檻という名の地獄が待っているのだから。

「可哀想ね、あの二人。」

でも、あの二人、なかなか面白いかもしれない。周藤さんの腰巾着とか思っていたの改めなきゃ。いい人そうだし。

「。。。。」

二人のことを可哀想なら、このゲームを終わらせてあげるべきなのかもしれない。

ヒントは『独自の方法』で隠した、か。そんな物、あの人を見てれば分かる。あの人ヒントをもっているのだろう。始まる前の行動を見ればすぐに分かる。

「両方側も見つけることが出来ないわけだわ。」

まあいい、今から私のすべきことをするべきだろう。

そう思って、生徒会室を出た。

「玲人ーーーーー!!!!出てこーい!!!!今まら一発殴るだけでゆる

してやるー!」

沙耶が叫びながら、一般生徒を殴っている。問答無用。喧嘩経験のない人たちにあんな攻撃避けられるはずなく、一撃で沈んでいく。

『ぐはあつ。一体何が・・・?』

そういつて倒れていく生徒会室前にいる面々。五十人近くいた人員は、いつの間にか十人足らずになっている。

『やばいです上谷副会長。女王がこちらに突撃して来てます!』

『何?あの放送で?実は莫迦なんじゃないか!?』

その通りです。ご愁傷様です。

『増援要請は?』

『それが、校内放送がジャックされているようで、使えません。』

いえ、そこだけブレーカーを落とすただけです。亮介も仕事をしたようだ。

『なんて野郎どもだ!取り合えず強行突破だ。このままだと全滅だ。』

作戦通りだな。後はこちらのターンだ。

『いいか、あけるぞ。3、2、1!』

副会長がドアを開けるのを確認すると、僕は思いつきり叫んだ。

「さーやー!」

勢いのまま副会長が外に出ると、後ろの役員たちがドアを閉めた。きつと、あふれ出ている沙耶の殺気が怖かったのだろう。

僕の肩に重く押し掛かる重圧は、僕より小さいとはいえ、彼女らにはきつかったのだろう。

『おい!まっつてくれ!閉めないで、開けてくれ!死んでしまっ!』

副会長はちよつとした錯乱状態だ。ドアを必死に何回も叩いている。

可哀想に、殺気を浴びなれていないのだろう。泣き出しておる。流石に、可哀想だなあ。

しょうがない。覚悟を決める。

「・・・おいで、遊ぼうか。」

小さく亮介と沙耶の合言葉をいうと、彼女は無表情で突っ込んでき

た。すごく怖い。だから、何も考えず、感覚に任せ右に体を倒した。ドカアアという轟音。彼女の拳がコンクリートにひびを入たようだ。もし当たっていたらと考えるとゾツとする。コンクリートから引くと、沙耶の手から血が出ている。

また、パンチの威力が上がったのか。そう感じると、たちがあるに立ち上がれない。久しぶりに、沙耶に恐怖を感じた。

「痛いじゃない。・・・何で避けるのさあ！」

そういつて、彼女は僕の上にまたがる。そして、殺気が僕に集中する。漫画や小説で、殺気を浴びると殺されたイメージが再生されるという話は嘘だ。本当に殺気を集中的に浴びたら、感じるのは恐怖のみ。それも底の知れない巨大な恐怖。体が動けず、心臓が止まりそうなほど早く脈を打つ。

「ごめん。」

なんとか声を搾り取る。これが僕の出来る精一杯の行動。出来るだけ声を震わせず、目を見て、相手に怖がっているという印象を与えないようにする。

「う・・・もういいよ。」

何故か、沙耶は頬をほんのりと赤くさせていた。目をそらし、少し拗ね気味の声で。

「本当にごめん。最近のことも、悪かった。」

「もういいよ！」

そして、不意打ちの溝への鉄拳。

「ぐはあ。」

「これで許してあげる。」

不意打ちで食らったそれは、僕の意識を狩るにはちょうど良かった。緊張の糸が切れた事も作用しただろう。ゆっくりと僕のセカイが暗くなっていた。

新たな同盟

作戦開始時間から三十分経った。未だ玲人から連絡が来ない。どうやら、沙耶に狩られたと考えた方がいいみたいだ。

「如月、お前の作戦は頓挫したみたいだぞ。」

何処にもいない生徒会室。そして、収まった沙耶の重圧。たぶん玲人が止めてくれたのだろう。これで俺が作戦を実行する理由がなくなった。後は、当人同士で自由に。

俺は、ゆっくり寝るとしよう。『王様』なのだからもう少しゆっくりにしても罰は当たらないだろう。そうもって、生徒会室を後にする。こんな乱戦中に、俺に仕掛けてくる莫迦はいないだろう。

そう思って屋上に向かう。沙耶が機能しなくなった特推生側に勝機はない。何せ俺も動く気もないのだから、後残って強そうなのは会長ぐらいだし、勝てっこない。なら、適当に寝て時間潰せばいいだろう。

屋上のドアが少しばかり開いている。ここは普段立ち入り禁止区域。主に俺がここでサボりまくったから。鍵を壊したし、あくつちやあくが、誰も好き好んでこんな所来る奴なんていない。汚いし、フェンスとか無いし、俺がいるって専らの噂だし。

そうもって、ゆっくり覗くと、二人の男女が立っていた。両方の会長たちだ。太陽の光のせいか、顔までははっきりと見えないが、あのシルエツトは間違いない。

「なんであの二人が？密談？なんで・・・むがむが」
急に、口を誰かの手でふさがれる。

「・・・そうよ。だから、静かにした方がいいわ。」

後ろから声が聞こえた。先まで全く気配が無かったのに、なんて女

だ。黙っていると、手を引いた。

「止める如月、急に後ろからとか怖えよ。」

「あら、貴方でも怖いものがあるのね。」

うるせーよ、常に怖い者が近くに二人もいるんだから、これ以上怖いものを増やさないでくれ。

「会長、何言ってるか分かる？」

「ここからじゃ、聞き取り難い。表情さえ分かれば、何を言ってるんだか分かるんだが……。」

「……何者？」

お前に言われたくねーよ。

「こつちに来る。」

「やべーな、どうする？」

「仕方ない、ドアの影に隠れる。」

そんなベタな隠れ方するハメになるとは、泣けてくる。俺が手前、如月がドアにうまく隠れる。

『……じゃあ、もういい？』

『ああ。連中も暴れたし、今年はこれで問題ないだろう。』

『確かに、暴れたわ。ラグビー部や野球部の用具はぼろぼろよね。』

『あいつら、表立って馬鹿にしたからな。』

会長たちは気付いていないようだ。俺らに関係の無い話をしている。

『じゃ、予定通りに。』

『ああ。』

会長たちが階段を下りようとしている。早く降りてくれ！気付かれたら、先輩に潰される。だって、となりに如月がいるし。

「……ばいばい。」

ゾクツ。鋭い視線が俺の体を貫いた。沙耶とはまた違う怖さだ。

あいつは野生児のようなただただ大きな恐怖だが、今のは違う。できれば触りたくないような、陰湿で嫌悪を感じるような……殺気？

「なんだ……これは？」

手が震える。沙耶ですらここまで恐怖を感じなかった。あいつのは、

分かりきっている。殺す気の無い殺気。だから怖くない。けれど、これは訳が分からないほど、逃げたい。この視線から逃げたい。

実際は、一、二秒ぐらいだっただろう。しかし、それはひどく長く感じられた。

「・・・大丈夫。」

そういつて、隣にいる女は俺の手を取った。沙耶とは全く違う、細く綺麗な手だった。

「『貴方なら』落ち着けるはず。周藤さんの殺気を受けることのできる貴方なら、大丈夫。」

につこりと微笑みかける隣にいる『女性』は、俺を冷静にさせた。柔らかい、普段の姿から想像出来ない安心させるような微笑だった。俺はそれを見て、手の震えが収まっていることを感じる事が出来た。

不思議な、魔法とでもいえるような笑みだった。もし、こんな女の前で震えているような姿じゃなくて、普段その姿を見せられたら、きっと俺は。

それぐらいの笑みだった。いつも不機嫌そうにいないで、さっきの笑みを見せてくれれば、モテそうだ。

「さあ、もう大丈夫ね。」

そういつと、隣にいる女は立ち上がった。まるで、先起こった事はなかった様に。

「矢崎会長にはばれた、か。」

あの女、出来れば二度と関わりたくないな。何を持っているか分かったもんじゃない。

「どうせ、兄貴にも気付かれています。私はともかく、貴方は。」

「は？気配うまく殺せていなかったか？」

「普通の人より上手かったけど、二人の前じゃああれでは落第点。及第点まではツーランク程度足りないわ。」

そういつて、如月は深いため息をついた。

「嘘だろ？」

それでも、あの沙耶を騙せるぐらい気配を殺すことが出来る。まあ、勘で場所は当てられるが。

「まあ、訓練しだいでまだ伸ばせる。精々精進することね。」

この学校に普通の人はいないのか・・・？そこら辺の高校と比べられないほど、要注意人物が多すぎる。

『お前ら、よく聞け！』

そんなことを考えていると、放送が流れた。校長の声だ。

『矢崎が宝を持ってきやがった！今年の勝者は一般クラスだ！』

『おおおおお！！』

何処からか、雄叫びが聞こえた。今年もまた、特推生側は負けたわけだ。

「やっぱり、こういうことなのか。」

俺は、如月の呟きを聞き逃さなかった。

「何がこういうことなんだ？」

そう尋ねると、こつちを向いて、先ほどとは違う、悪巧みをした子供のよな顔をした。

「さあ、なんのことやら？」

階段を降りはじめた如月は、教えてくれないらしい。そう思って、一緒に階段を下りると、急にこちらに振り返った。

「なんで、特別推薦制度があるんだと思う？」

何故？それは・・・。

「前理事長が生真面目が好きじゃなかったからじゃないか？」

そう、前理事長は、前代稀に見ない天才であり、莫迦でもあった。学校を改革し、今のような奇妙な学校を作り上げた。

「それは、教科書すぎる考えじゃない？最悪前科持ちですら入学させてしまうような制度を、理事会が許可すると思う？『当時』は、真面目な学校だったのよ。安定した学力に、日本有数の超一流大学への推薦枠すら持っている数少ない学校。そんな学校を今のよう改革した、『理由』があると思わない？」

そう指摘されるまで、何にも思わなかった。天才とはいえ、口車

だけでこのような改革は可能なのか。いや、無理だろう。絶対的な基盤を作った学校がそれを易々と壊すわけがない。

「その内の一つの理由が、この学校の『お祭り』に隠されていると思わない？」

『お祭り』とは、前理事長が残していた多すぎる行事。

「まあ、これは私の勝手な思い込みだけど。」

そういつて、また階段を降りはじめた。

「なあ、なんでそんなこと、俺に話したんだ？」

「何でつて、ここに『来れた』のは、私と水瀬君だけ。私たちは、会長たちの『秘密』を手に入れることが出来たじゃない。」

会長たちの『秘密』ね。さっきの会話にそんな大切なことが含まれていたのだろうか？

「これも何かの縁だと思わない？一緒に、探す仲間も欲しかったし、どう？」

如月は、手を差し伸べてきた。

学校の謎か。今の生活も退屈ではないが、そろそろ玲人達とずっとつるむのも潮時だと思っていたし、ちょうどいいときかもしれない。これから、すぐには言わないが、少しずつこの機にくっ付きすぎた仲から離れていくとしよう。このままでは、俺らの関係はどちらにしてもギクシャクしてくるだろうし。

「面白そうだな、俺も混ぜてくれ。」

手を取ると、如月は少しばかり頬を上げた。

「こちらこそ。」

これからの学園生活に新たな『何か』が始まった。

後の祭り

兄貴が帰ってくる。それは、僕が決めた七つの緊急事態の一つである。最悪、僕の安全かつ楽しい生活を壊す可能性を秘めている。

その事を聞いたのは、昨晚だった。父と妹が喜びながら電話に出ていた。思春期の妹が中年の父と喜びながら電話に出ている姿は奇怪であり、普段の妹の態度からは考えられないものだ。

そこで聞いてみた、何で喜んでいるのか？、と。今考えれば、二人の共通点なんて兄貴ぐらいという事を忘れていたが。

妹の比奈ひなは嬉しそうに、自慢のポニーテールを揺らしながら「にーさんが、帰ってくるんだって!」

と喜んでいた。150cm弱の体は、彼女の実年齢より低くみられることたびたびあるが、ぴよんぴよん跳ねながら喜んでいる姿はそう感じさせた。

「……は?」

「にーさんが帰ってくる、やったー!」
ってな感じだった。

兄貴である横須賀よこすか真依まねえは、今は無き両親の親友夫婦の子供だ。僕が物心付く前に、引き取られたためか、血縁者ではないと亡くなった母から伝えられたときは、信じられなかった。ちなみに、比奈は兄貴とは血縁者であり、僕の血縁者は祖父母と父だけである。

そして、兄貴は日本においておくには勿体無い鬼才ともいえる人物だ。小学校入学時にして中学修学課程を終了し、小学校卒業時には、高校修学課程を修了させた。その結果、びっくりした父が飛び級制のあるどっか外国の大学に通わせてた。どうやら、区切りが付

いたから日本の学校にでも通おうか、という話らしい。

兄貴は、僕が高校入学が決まったとき帰ってきたから、会つのは二年ぶりくらいだ。

「何時帰るって？」

「確か飛行機の関係で、こっちに着くの正午ぐらいになるっていった。」

朝ごはんを家族で食べながら、何気なく比奈にきいて見る。正午か、今は朝の九時だから三時間くらい。リミットは三時間。ならそれまで存分に兄貴がいない生活を楽しむとしよう。

そう思つて、僕は自分の部屋のベットのの上に寝転がる。昨日の沙耶にやられた傷が未だ痛むみたいで、少しご飯を食べるのがつらかった。といつても、重症というほどでもないが。

目を閉じると、急にふわふわとした気持ちになった。きつと、満腹だからだろう。

痛みで目を覚ました。殴られた腹部から激痛が走る。

「いたたた。」

目を開けると、白い天井が見え、保健室独特の匂いがした。何回も此処にくると嫌でもこの匂いを覚えてしまう。

「起きたか。痛いところは？」

保健室の先生、西原栄子さいはらえいこが覗き込むように僕の近くにいる。必要のない白衣とメガネが印象的な三十代前半の女性だ。

「腹、いや溝がいたいかな？」

体を動かしながら他に痛んだところがないかチェックする。制服をまくると、拳だいの青あざがあった。

「君、またやられたのか。喧嘩しないように、と何回言えばいいんだ？」

かなり呆れ気味の養護教諭は、湿布を僕に渡した。既に用意してい

たようだ。

「先ほどまで周藤君がいたが、帰らせた。」

時間を見ると七時を回っていた。一応、女子生徒としての配慮らしい。まあ、夜に彼女が出歩いていると危ないのだろう。主に、襲った方が。

「あの姿を見ると、彼女と付き合うなどとはいえない。だから、喧嘩をするな。」

どんな姿ですか、先生。

「・・・はい、分かりました。」

「何か言いたそうだな？」

「いえ、なんでもありません。」

この人は、口で硬いことで有名な先生だ。どんな手を使っても口を開けてくれない。

「なら、さっさと帰らたまえ。暖かくなり始めているとはいえ、まだ日が落ちると寒い。」

「はい。あ、先生。」

「なんだ？」

「どちらが勝ちましたか？」

そう聞くと、少しうんざりしたような表情を見せた。

「悪いな、打ち上げとか言ってる騒いだ生徒の後始末で実は私も結果を知らないんだ。」

「そうですね。」

打ち上げで騒いだ奴らか・・・そっぴや、勝ったら打ち上げは焼肉だったな。

「じゃ、失礼します。」

僕は急いで保健室を出た。何となく、今日は居辛かったからだ。

目を開けると、少し気だるかった。掛け布団をどけていつものよ

うに時計を確認する。

そこで気付いた。僕は寝る前に掛け布団なんかかけてない。急いで時計を確認する。

『十一時五十分』

「。。。。」

うたた寝しまったでは済ませられそうに無い状態だ。様々な感情が僕の中で暴れまわっている。

『おにーちゃん！おかえり！』

比奈の声が聞こえる。幻聴ではない。思わず、時計を落とす。

「やってしまった。」

後の祭り。最近そればかりだ。

久しぶりの同窓会

十五年ぶりに高校の同窓会というものに出席した。妻が死んで、子育て忙にしくなつて、何時の間にかそういうのに出るといふ選択肢がなくなつていた。

場所は都内の一流ホテルだった。集まつた人数は百人ほど。聞くに多い方らしい。同窓会というよりパーティーだった。皆好き勝手に話し込んでいる。

みんな、久しぶりだ。顔が変わっているが性格や雰囲気似てい

る。
「眞也！」

その名で呼ばれるのは本当に久しぶりだった。一瞬反応が遅れた。

「正樹か。」

不思議な者だ。会つのは本当に久しぶりなのに、何となくそいつが誰だつたか分かる。

水瀬正樹。中年でもダンディな顔をしていて、その姿はバーのマスターのような奴だ。高校にして、一流のバーでバーテンダーのアルバイトをしていた、変わり者。

「久しぶりですね。前あつたのは千春ちはるさんの葬式の時ですから、十五年ぶりですか。」

千春は僕の妻のことだ。

「うん、そうだね。君と会つのは、それぐらいになるね。」

「元気でしたか？」

「まあまあね。色々大変な思いもしたけど、あれからはそんな大変じゃ無かつたよ。」

「意外ですね。『誘蛾灯』といわれた君のことだから、色々あつたのかと思つてました。」

「そこまで人生付いてない人間はそうはいないよ。」

『誘蛾灯』、久しぶりに聞いた僕の別名だ。僕はとりあえず事件に巻き込まれやすい。身近で起きた事件は、僕を巻き込み大きくなる。いつの間にか台風の目になること何十回。そして、その原因と言われるのは

「いたいたー！俺をのけ者とはいいい度胸じゃないか！」

近づいてきたのは、その綺麗な声とは似合わない口調を使ってくる、すだち周藤京子だ。

「この人が回りにいなかったからかな。」

「そのようですね。」

京子は、未だ四十台とは思わせない顔つきをしていた。おぼつかに近い髪型は未だに女学生時代の彼女を思い出させる。しわが少しあるものの、それでも二十代といっても通るのではないか、と思ってしまう。

「お前、家近いのになんで俺のうち来ないんだよ！」

「なんで僕だけ！？それなら正樹だって、地区は同じでしょ？」

「正樹は、家にちよくちよく来てくれんだよ！来ないのはお・ま・

えだけだ！」

そういって、ヘッドロックをかけてくる。正樹の方を睨むが、済ました顔でビールを飲んでいる。くそっ、裏切りものめ。

「ギブギブギブ！」

京子は全く腕が落ちていないようだった。本当に痛い。

「僕の代わりが貴方の家によく行くでしょ？」

「お前、そりゃあいつは若いときのお前そっくりだが、だめだ。俺はお前にも会いたい。」

そういって、更に強く首を絞める。正直、かなり痛い。

「痛いって！僕は、ここ最近遊ぶ暇も無いほどいそがしかったんだ！」

叫ぶと、いったん首から手が離れ、正面で向き合う。

「……。」

じつと、見定めるような目で僕を見てきた。無言の攻撃。怖すぎる。「すいません、今度から出来る限りよらせていただけます。」

「よし、許す。」
謝らなかつたら何をする予定だったのだろうか？

「それにしても、皆で会うのも久しぶりですね。何時以来でしたっけ？」

さりげなく会話に復活してくる正樹は、やはりうまいタイミングで入ってくる。

「いや、政人まさひとと裕香ゆうかが事故ったときじゃねーか？」

京子は平気のようだが、僕は未だ吹っ切れていない。あの頃、千春と僕と間に出来たあいつが生まれてる前の出来事だ。その二人が、事故にあつた。二人は重症で、千春が裕香と必死に話しかけている様子しか思えだせない。

「そうでしたね。かなり前に感じますね。」

「なんとなく、つらくて会わなかつたつてはなしじゃねーか？」

「それもあるよ、正直。僕は今でも吹っ切れてない気がする。」

彼らのことは吹っ切れるはずもない。大切な仲間なのだから。

「私ですよ。今でもたまに彼らをおもいだします。」

「そうか？俺はどつちかつて言うど懐かしいな。」

こんな事いえるのは、京子しかいないだろう。他の人なら激怒しているが、京子だから許される台詞だ。

そういうと話は、高校時代の雑談に変わった。懐かしく、楽しかった高校時代に。

悪意を感じさせる視線

玄関に向かうと、大きなカバンを持った男が立っていた。170センチぐらい、肩ぐらゐまで伸ばした長髪。きつと、向こうで鍛えたんだろ。少しばかり、筋肉質になっている。

「おかえり、兄貴。」

そっけなく言うと、目の前の男は少し笑った。

「ただいま、玲人。」

まるで、別人だった。僕の知っている兄貴ではなくなくなってしまって、他の誰かにしか見えない。そのことに、なんとなくショックを受けているような気がした。

「親父は会社？」

兄貴がリビングに入っていくと、比奈がそっくりそのまま付いて回る。二人は、性格も外見も対極のようだが仲がいい。

「ううん、同窓会とか言ってたよ。」

「親父が同窓会・・・？」

僕もそれを聞いてびっくりした。父さんが同窓会なんて僕の記憶が正しければ行ったことはないはずだ。昨日は、疲れて話を聞いていなかったからなあ。

「それにしても、久々に息子が帰ってきたって言うのに。全く、酷い父親だ。」

兄貴は少しばかり呆れているようだ。

「にーさん、今回は何時までいるの？」

「んー？一年ぐらいはいる予定。」

「本当！じゃあまた一緒に暮らせるんだね！」

そういって、比奈はまたピョンピョン跳ね始めた。兄貴がこちらを見て、複雑な表情している。まあ、理由は分からなくも無い。

その後、リビングに座って、麦茶をのみながら兄貴の土産話を聞くことになった。比奈が聞きたいって何回も言うからなんだけど。話としては、面白かった。僕の知らない世界だったからだ。外国では、僕らの国と全く違った教育方法の上で成り立っていた。話を聞く限りでは、兄貴の留学先はパブリックスクールで、結構優遇されるような立ち位置にいたらしい。

「おっと、玲人。お前に聞くことあるの忘れてた。」

「何？」

「今の学校・・・月光館学園だっけ？そこつて、面白い学校？」

「え・・・？」

兄貴がそんな事を聞く意味が分からなかった。兄貴は、他人の評価や噂を最も聞き入れないような男だったからだ。

「面白い・・・かな？」

困惑しながらも、そう答えている自分がいた。沙耶や亮介がいて、変な決まりごとがある、今の学校は僕にとって大変面白い学校であるのは間違いない。

「そう。『なら、間違っていないかったわけだ。』」

そういって、兄貴は目をつぶった。もうこうなったら無駄だ。話しかけても何も答えない、『思考タイム』だ。そして、勉強もスポーツも考えずにやってのけてしまう兄貴にとって、この格好を取るのには『ただの遊び』のときのみ。

つまり、良からぬ事を考えているわけだ。

「・・・。」

そう思ったら、僕も先読みしなければならぬ。『ただの遊び』について、僕にとって隕石が落ちてくるぐらい大きな衝撃が待っているのだ。何とかして回避しなければならぬ。

昔からそうと決まっている。大抵、可愛い弟を巻き込んで、大きな爆弾を爆発させる。兄貴は僕にとつてただの愉快犯だ。

さて、ヒントは先ほどのやり取りだけだ。面白いかって、兄貴が聞いてくるのはすぐくおかしいのだが、……。

「まさか、ね？」

一つだけ、可能性があるものを発見してしまった。兄貴ならやり得ない。とてもとても怖いことだ。いいや、それは最悪の場合としておこう。他にもたくさん可能性がある。兄貴だって莫迦じゃない。そんなことしてこないと信じたい。

「どうしたの、玲人？」

そう聞きながら、比奈は首を傾げる。二歳年下と言つのに、呼び捨てにするその態度は何度いっても直らなかつた。

「いいや、なんでもない。皆でご飯いこうか。町でも案内しながら。」

「流石、玲人。気が利く。」

「さすが玲人！」

きつと、その時が来るまで兄貴は教えてくれないだろう。そういう奴だ。僕はただ、それが最悪の場合であることを祈るしかない。

天才と莫迦は紙一重でありませんように。

翌日。目覚めは最悪だった。もし、兄貴のよからぬ事が大事だった場合を考えていると、眠れなかつた。

食卓に行くと、ルンルンの比奈と二日酔なのか少しばかり顔が青い父さんが席に座っている。

「兄貴は？」

昨日の夜は、自分の部屋で寝ていたはず。だから、早朝に出かけたのか。

「なんだかよく分からないけど、『挨拶しに行く』って行つてたよ。」

「『挨拶』・・・ねえ。」

この地域で兄貴の知人は少ない。恩師なんかはいなかったし、行く場所は狭まれている。ていうか、周藤家ぐらいいしか思いつかない。何だかんだ言つても、女子にモテて性格も微妙だったから、妬みとかそういうことが好きな奴らの標的になっていたし。

「ねえ、玲人には何処に言つたか分かるの？」

「純粋に興味があるのだろう。比奈は上目遣いでこっちを下からのぞいてくる。」

「さあ？」

「ふーん・・・。」

そう答えると、ちよつと不機嫌そう、いやかなり不機嫌そうな顔になった。

「知らない、というか僕は兄貴とあんまり係わり合いを持たないから、分かるわけ無いじゃないか。」

「へー・・・。」

完全に拗ねているようだ。どうもばれているらしい。十何年と暮らしていれば、嘘も通じなくなるか。

「じゃあ、行つて来るよ。」

居辛くなったからか、僕は急いでご飯を平らげて、席を立つことにした。

「ちよつと待て、玲人。」

すると、珍しい人から声が掛かった。父さんだ。朝は低血圧で頭が動いておらず、会話に入つてこない父さんが珍しく入ってきた。

「何、父さん？」

「あの家に用がある。」

あの家、多分周藤家の事だろう。ていうか、それ以外考えられない。・・・。」

しかし、父さんが京子さんと顔見知りという事は知っているが、父

さん自身は京子さんを苦手としているはずだ。そして何より、彼女と接触することに関して無意識的な恐怖が所所で見える。本当に何かしらの大事な用事があるのだろうか。でなければ、頭の回らない様なこんな朝に向かわない。

「わかった、一緒に行こうか。」

こういわなければいけない気がした。

周藤家に付くと、父さんは三回深呼吸をした。僕が入ろうとすると唾を呑んだような音が聞こえた。……。

「おはようございます、京子さん。」

「おはようさん。」

京子さんは、新聞を読みながらコーヒを飲んでいた。おじさんくさいっす。

「お、そういえば真也は着てるよな？」

言いながら、彼女はニヤリと笑った。来なかつたら一体父さんになにがまっているのだろうか。

「はい、来てますよ。」

と、横を見ると玄関で空を見上げている中年のおっさんがいた。何故か覚悟を決めたような顔をしている。

「おはよ、京子。」

実に弱弱しい挨拶だった。こんな弱気な姿を子供として見たくなかった。

「はい、おはよ。随分来るのに時間掛かったな？」

「いやいや！そんなこと無いから！気のせいだよ！」

父さんが不憫だった。そんな怖いのだろうか？いや、怖いに違いない。僕だって、周藤家の娘は怖い。僕は出来るだけ父親の姿を見ないように、沙耶の部屋に向かった。

「沙耶ー、朝だよ！」

今まで見たものを忘れるため、勢いよくドアを開けた。

ただ、今日は頭が回ってなかったらしい。『兄貴があいさつ回りにここに着たのをすっかり忘れていた。京子さんだって、食事を終わらせて、コーヒーを飲んでいたじゃないか。きつと、今日は沙耶が起きて、早めにご飯を食べ終えたんだろ。だから、沙耶は着替え途中なんだろう。白いで統一されたフリルの付いた下着すがたはまるで女神のような美しさだ。劣情よりもそういった気持ちの方が出てきた。』

数秒、固まった。沙耶でなければ、確実に嬉しいアクシデントなはずだ。ただ、今は体中に嫌な汗しか出てこない。まさか、こんなギャルゲーみたいな展開になるなんて思っても見なかった。

「玲人、大胆ね。」

鬼がニヤリと笑った。顔は端正なのに、なんでこんなに怖いのだろう。親子そっくりだ。

「アハハ、素晴らしク綺麗ナ身体デスネ、沙耶サン。」

「そう、ありがとう。」

そう聞いた時には、身体に鉛だまのような拳が僕の腹に刺さっていた。

「はっ。」

目覚めると、冷たい木の肌触りを感じた。顔を上げると、そこは見慣れた教室。

「ここは？」

見渡すと、クラスメイトが雑談をしている。どうやら、僕の教室らしい。

「おつかれ、玲人。」

後ろから聞きなれた声があった。

「亮介。」

僕の唯一慰めてくれる、優しい幼馴染様だ。

「何をしたか知らないが、ご愁傷さまだ。」

「なに・・・が？」

そう聞いたとき、身体中からありえない鈍痛が僕に伝わった。

「ぐはっ。」

一気に瀕死になった気がする。とりあえず、机に身体を預ける。

「どうやらお前は重症みたいだな。腕や腰辺りに多分大きな痣があったな。」

どうやら手当てしてくれたようだ。湿布やら包帯やら、雑だが巻いてある。

「ありがとう。でも、どうして僕は学校にいるの？」

「・・・覚えてないか。まあ、気を失ってるからな。まあ、知らない方がマシな事はたくさんあるんだ、玲人。」

どうやら言えないぐらい惨めな出来事らしい。まあ、これぐらいで済んでよかったと思う。一撃で意識を持ってかれたし、殴られたときの衝撃はない。

『おい！このクラスに転校生らしいぞ！』

そんなとき、面白いことを言う男子生徒が入ってきた。

『しかも、帰国子女だ。格好いい男だった！』

「・・・」

一部から黄色い声があがった。まだあつてないのに、そんな騒がれると傷に響く。

「・・・で、ちよつと待て。帰国子女、男、格好いい。」

「HRはじめますよ、皆さん。」

先生が入ってきたが、皆落ち着きがない。席に着くが雑談は途切れない。

「一部聞いていると思いますが、入学式に間に合わず、ちよつと遅れた転入生となります。入ってきてください。」

そういつて入ってきた男は、大柄で筋肉質な男だった。

「はじめまして、今日から一緒に過ごさせていただきます、横須賀真依

です。」

クラスの半分の視線が僕を貫いた。悪意を感じさせる視線だった。

お知らせ

おはようございますこんにちはこんばんは、作者です。

早速ですが（前略とか書た方がいんですかねー？）、私愛用のPCがお亡くなりになりました。急な話でして、作者も混乱してます。

つい二週間前の事です。いつも通り起動しようと、ボタンを押しても画面が真っ暗。「あれ？」とわざとらしく声に出しても起動しません。色々な手段を試してもシーンと静かなまま。エキスパートはいえ、極力ネットは繋がずにいて前日までしつかり動いていたのに…。しょーじき、ショックです。思春期と一緒に過ごした相棒がどうやら寿命を迎えたらしいようで、ピクリとも動きません。

大学生とはいえ、PCを買う金もないので、少しの間休載します。もしかしたら後一回今年中にするかもしれませんが携帯で打つので相当ペース遅いので、下手したら次PC買うまでかかるかもしれません。

最後にいつものぞいてくださるそのあなた、ありがとうございました。あなたがいるから私は書き続けられます。

来年の3月には必ず更新します！（ どんだけかかってんだw

楽しみにしててくださいねー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7240/>

くらすかくめい～起こすのは幼馴染～

2010年10月10日13時57分発行